
W i n g 2

Fill

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wing

【Zコード】

Z2945E

【作者名】

Fiji

【あらすじ】

鳥人族優先の世界を変えようと一人の青年が立ち上がった。青年は世界を変えられるのだろうか、それとも・・・。

変貌を夢見る青年（前書き）

Wingの続編となっていますが、Wing2から初めて読む人にも分かりやすく書いたつもりです。
ですから、気軽に読んでいただけたら光栄です。

変貌を夢見る青年

Win 62 変貌を夢見る青年

「伝助、また薬草を探しに行くのか？」
女の人が赤ちゃんを抱きながら言つた。

「ああ、行つて来る。2、3時間で戻る。」

王が帰還してから4年の月日が過ぎた。俺は、もう22歳になった。こつちの世界の獣人族でも小人族でもない俺と同じ普通の女と結婚して、今では赤ん坊もいる。いや、ちょっと普通じやないかもしけないけど。

王は鳥人族以外の種族を皆滅ぼし始め、俺たちは地下に逃げ込んだ。驚くことに、地下は広く、水もあり、人間が住むには適していた。といつても、地下水の量はほんのわずかだ。

しかし、やはり、太陽の光が恋しい。そのせいか、植物の育ちも悪い。病に犯される人も増えている。だから地上に行き、薬草や食料を調達してこなければならない。

地上で鳥人族に見つかれば、即地下の入り口を見つけられて、皆殺しにされる。前に3回そんなことがあった。俺たち家族は裏側から逃げたから無事だつたが・・・。

キヨロキヨロツ

「どうやら近くに鳥人族はいないようだ。」

伝助は砂の色に着色したマンホールのような扉を軽く持ち上げて地上の様子を見た。

元々ここはスマラの村があつた。そして森と滝があつた。けれど、今じゃ水が枯れ、森も鳥人族が伐採したせいでもはや砂漠になりかけ。地面も乾ききつてあちらこちらにひびが入つていて。あるのは岩と少々の雑草だけ。その中からわずかな食料と薬草を探していく。

日が照り、サウナに入るより暑い。しかし、水も豊富ではない俺たちは、のどが干からびようと、水を飲むことは許されない。

ザツザツザツ

岩々が並ぶ中、伝助はただ一人、歩いていく。風が吹く度に砂が舞い、視界がぼやける。強い風が吹けば、砂は全身を叩きつける。とても痛い。まるで雹が降っているようだ。

「！」

砂あらしの隙間から、人影が見えた。鳥人族だろうか・・・。しかし、倒れている。鳥人族だろうと、助けてあげなければ・・・。伝助は人影の方へ駆け寄った。

「大丈夫か？！」

「・・・・。」

返答がない。脈はある。息もわずかだが吸つたり吐いたりしている。

外見は一見普通の人間だった。しかも、18歳くらいのただの青年だ。鳥人族じやなくてよかつた。

「待つてろよ！すぐ治療してやるから！！」

伝助は、青年を背負い、来た道を帰つていった。

「・・・・ん・・・・？」

青年が恐る恐る目を開けると白い壁で覆われた部屋のベッドに寝ていた。

「目が覚めたか？」

伝助が部屋に入ってきた。

「あ・・・・えっと・・・・こは？」

「教会だよ。ここは病院も兼ねて怪我人や病人を寝かせる部屋が何個もあるんだ。」

改めて青年を見ると、金色の髪、蒼く透き通った瞳、とても丈夫そうな服装というか鎧姿だった。

「あの・・・僕の腰に提げていた剣は・・・？」

青年は部屋の隅々まで見渡した。

「ああ、あの剣なら先端が少し曲がってたから鍛冶屋に直しても
らってる。俺の嫁が頼めばすぐ直してくれるからな。」

青年は安心したのか、ほつと胸を撫で下ろした。

「そういえば、名前もまだだったな。俺は伝助。薬草売りをして
る。」

「・・・・僕の名前は・・・・ライト・・・・ライトって呼
んでください。ところで、伝助さん・・・。」

「せん付けしなくても、伝助でいいよ。」

「気を悪くしたらすいませんが・・・その右腕、どうしたん
ですか？」

伝助の身体を見ると、右腕が不自然といつより、右腕が無いとい
つた方がいいだろう。

「はつはつはつ・・・とても馬鹿げた話だが、切られちま
った。」

伝助は無理に笑っているようだった。

「何で切られたんですか？」

ライトは質問を続けた。

「・・・・王と話し合おうとしたんだ。俺は地球界の人間
だから特別に会うことができた。といつても、手錠をつけられ、足
には鎖を巻かれ・・・

「レイズ王！何故、魔族を滅ぼし、鳥人族以外の種族まで、滅ぼ
そうとするんだ？」

俺は跪かされたまま叫んだ。

「・・・・そうだな。鳥人族も滅ぼしてもいいかも知れない・・・

・。
「！」
「！」

「私の邪魔になるものは全て消してしまうだけ。他に理由はない。いや、もう一つ理由があるかな。私には、もうこんな世界に価値はないと思うから……。」

「……月華の言つ通りだつた……話し合つても意味がない！」

歴を鑑み縛めて用立詔にてせりた。

「……口の減らない餓鬼だ。斧をここへ。実験体にするものだが・・・腕と脚は一個で充分だろう・・・?」

王は白衣を着たの方を見た

「おお、王様！！腕と脚は一 個一 すすすーーで充分です！ーー！」

白衣の人はまるで脅されているみたいに片言な喋りだつた。

ザンツ

王は颯爽と斧を手に取ると、刃先を振りかざし、一瞬で俺の右腕を切った。言葉にはならない程の激痛が全身を走った。

卷之二

そういう、王はまた斧を振りかざした。

運がいいことに、王は俺の脚ではなく、足に巻かれた鎖に斧の刃先をぶつけた。

ダツ

僕は命からがら部屋から抜け出した。

「チツ・・・逃げたか。追つて、捕まえろ。見失ったら、右腕から流れた血の跡を追えばよい。」

王は頬に手をつき、暇そうに遠くを見た。

俺は逃げていたが、城の構図も、出口さえ分からず、ただ逃げ回っていた。

「出口は」こちらです！－

声がした。誰の声かは分からなかつたけど、それを信じるしかなかつた。

声のした方へ行くと、使い古しの暖炉があつた。使っていないせいか、蜘蛛の巣があちこちに張り巡らされていた。

「こちらへ早く！－

下のほうから声がする。暖炉の真下を見ると、重そうな鉄でできた蓋があつた。

ガラガラガラ・・・

蓋を除けると、女の子が居た。

「早くこの中に入つてください！あ－－その前に傷口にこれを当ててください！」

女の子は俺にガーゼのハンカチをくれた。そして、女の子は素早く床に零れた血を裾で拭き取つた。

「まあ、こちらへ。」

暖炉の下の蓋を閉じ、女の子についていくと、地下の村らしきところに着いた。

女の子に訊くと、俺が捕まつてセシディアの城に行つている間に鳥人族が住む以外の町、村全て焼き払われたらしい。それでみんな地下に逃げてきたりしい。

しかし、数ヶ月して、その地下も鳥人族に見つかり、爆弾を放り込まれた。他の地下に行つても同じ事の繰り返し。そして、いつの間にかセシディアの地下に居たはずなのに、スマラまで追い込まれちまつた・・・ひどい話だろ？ははは・・・

伝助は、ライトにまた無理して笑つてみせた。

「・・・あの、地上に連れて行つてくれませんか？」

ライトはいきなりそう言つと、布団を跳ね除けた。

「え・・・・?」

「身体はもう大丈夫ですから。お願ひです、地上へ行かせてください。」

ライトは必死に伝助の裾にしがみつき、お願ひした。

「・・・・・。」

伝助はぽかんとした表情だったが、クスッと優しい笑みを浮かべた。

「分かった。だけど病人を連れ出したと知れたら俺がシスターに怒られちまう。だから裏の出口から地上に出るぞ。それでもいいな?

「はい。それでいいです。」

伝助についていき、ライトは教会を後にした。

「・・・・・ここ・・・・・は・・・・?」

暗い闇を潜り抜けると、紅い光が差し込んだ。地上は夕方なのだ。そして、辺りを見渡すと、十字型に組み合わされた枝やパイプがあちこちに地面に刺さっていた。地面には掘られた跡の膨らみがいくつかある。

「お墓さ、ここにいた人たちの・・・。」

伝助の髪が風でなびいた。ライトは、お墓の一つ一つを見た。そして一つのお墓が目に留まった。跪き、そのお墓をよく見た。

Set u

干からびたこけを纏つた十字型の木の枝にはそう書かれていた。

「俺と一緒に旅をしてたよ、そいつ。とてもいいやつだったたつた・いや、この墓場で眠つてゐやつ全員いいやつだった・・・それなのに・・・。」

伝助の瞳は僅く遠くを見つめていた。

「あの、これで全部ですか・・・?」

ライトは目の前に果てしなく広がる墓場を見て言った。

「見つかった遺体だけだよ・・・ここにあるのは・・・。あと二人、見つからないんだ。まだ生きているのか、それとも遺体もろとも粉々に砕けたのか・・・。」

「・・・・僕が・・・・ここへ来たのはこの世界を変えるためです・・・・だから・・・・」

ライトは曲げていた膝を伸ばし立ち上がった。一日一夕日を見て、その次に伝助の振り向き、顔を見た。

「僕はこの世界を変えてみせる・・・！」

To be continued

神に見放されたシスター

Wing2 神に見放されたシスター

「僕はこの世界を変えてみせる・・・！」

ライトの瞳は透き通つていて、真つ直ぐ伝助を見つめている。タツタツタツタツ

誰かが地下から駆けてくる足音がする。シスターのようだ。
「伝助さん、勝手に怪我人を連れ出して・・・あー！」
ガツ

シスターは伝助たちの前で小石に足を引っ掛けてしまった。
パシッ

転びかけているシスターの腕をライトが掴んだ。

「大丈夫ですか？」

ライトが心配して言った。

「あ・・・ありがとうございます。足も挫いていないし、大丈夫です。

それにしても、伝助さん、怪我人を勝手に連れ出さないでくださいよ。心配しますから・・・。」

シスターは伝助に注意を促した。

「ああ、悪かったな。あ、そうそう。こいつは教会のシスターで、さつき俺が話した恩人の女の子もこいつ。」

「教会で病人を看ております、シスタークレスと言います。よろしくおねがいします。」

「僕はライトって言っています。こいつはよくしゃべります。」

ライトとクレスは軽く会釈した。

「そういうば、さつきの話だが・・・世界を変えるつて?」

伝助が問い質した。

「今の王を辞めさせるんです。」

「！・・・・・ そんなことできるわけがないさ！鳥人族は俺たちの意見は聞くはずない！それに襲撃を仕掛けても飛べるやつらの方が有利だ！空からの襲撃にはやはり対処の使用がない！！」

「それでも僕は世界を変えたいと願う・・・・いや、願うだけではなく、変えるために行動を起こしたいと思つ。」

「だから、そんなこと・・・！」

「伝助さん、ちょっと席を外していただけますか？」

クレスが言つた。

「えつ？・・・分かつたよ・・・・。」

伝助は渋々地下へ帰つていつた。

「・・・・あなたがやろうとしていることは、人を殺めてることになりますか？」

クレスが訊いた。

「ええ、そうです。僕は今の王を殺しに行こうとしています。もちろん、王以外にも殺すでしょ。王の周りには多くの兵士がいますから・・・きっと大規模な戦争になるでしょう。神の掟に反するのは承知です。」

ライトの口調からも真剣さが窺える。

「・・・・少し私のお話を聞いていただけますか？」

クレスが顔を上げて言つた。

「・・・？」

ライトはクレスの少し悲しそうな表情にどう反応していいのか分からなかつた。

バサツ

「！」

クレスの左の背中から大きくて立派は翼が姿を現した。

「・・・・私の母親は鳥人族でした。父親は普通の人間で・・・私が6歳のとき一人とも殺されました。私はお城の中の教会に引き

取られました。

母親が犯した罪は鳥人族以外の者と結婚したこと。父親の罪は鳥人族と結婚したこと・・・。
愛しただけで殺される世界に神がいると思いますか？・・・いるとしても、もう私たちは見放されています。」

クレスは涙をこらえている。

「・・・こんな話をしても埒が明きませんね。

私も・・・この世界を変える手助けをさせていただきたいのです。

「えっとそれは・・・つまり・・・」

クレスの発言にライトは動搖した。

「私も、戦場に立ちたいのです。弓矢なら私使いこなせますし、大きな戦いをするのなら、怪我人を看病する人が必要になつてくると思いますし・・・。」

クレスの目は真剣そのものだった。

「・・・でも・・・そんな修道着じや・・・」

「なら、着替えればいいんですね。地下に行つて着替えてきます。

クレスは地下へ走り去つていった。

「・・・まだ一緒に行くと決めたわけじゃな・・・言うのが遅かつたか・・・」

ライトは頭をポリポリと搔いた。

「あ！しまつた！！伝助に剣を預かつてもらつてゐんだつた！取りに行かないと・・・！」

ライトも地下へ慌てて走つていった。

To be continued

旅立つ前に

Wing2 旅立つ前に

地下に帰ると、人が集まっていた。野次馬のようだ。中に何か言い争っている人がいる。

「俺がこんなの無料で修理するわけがねえだろ！！しかも最高級のミスリルを使って、これじゃ大赤字じゃねえか！！」

鍛冶屋らしきおじさんが女人に怒鳴つている。

「ふんっ！あんたが無料で修理してくれるって聞いた証人が何人もいるんだ？！だから、あたしはお金は一切出さないからね！！」

「俺も聞いたぞ！！」「鍛冶屋のぼったくりめ！！」

女人人は、三つ編みでボニー・テールのような髪型をしていた。両手で剣を持っている。そして、スリットの入ったスカートに胸元が見えるチャイナドレスのような格好で、スタイルも良かつた。そのせいか、周りの野次馬の男たちは女人の味方で、鍛冶屋のおじさんに罵声を浴びせた。

「くつ！！どうせ呪術師のお前のことだ、また俺に剣を修理するように呪術でもかけたんだろう？」

「さあね？かけた覚えはないと思うが・・・？」

女人人は首の後ろをさすりながら言った。

「絶対かけただろ？！！」

「うつさい！！！かけてないって言つてるだろ！！あんた、あたしの胸元見て鼻の下伸ばしてたから、修理代無料にしたの覚えてないだけじゃない？？！」

女人人が大声で言つた。

「やっぱりあのおっさんそういうやつだったんだ・・・」「H口じじい・・・」「やらしい・・・」

周りから、ひそひそと小言が聞こえてきた。鍛冶屋のおじさんは冷たい視線が集まつた。

「お、俺はそんなつもりじゃ……へへへ……持つてけ泥棒！」

みんなの視線に耐え切れなかつたのか、鍛冶屋のおじさんはその場から走り去つてしまつた。

「泥棒じゃなくお客様だ……あんたみたいなやつはとつと帰つて水でも啜つときな……」

「よつ…さすが姐さん…かつこ…」「ミーシャ姐さん最高！」

「！」

野次馬から次々と口笛や叫び声が聞こえる。

「ん？」

女の人は何かに気付いたのか手を振つた。

「ミーシャ！…また揉め事を…！」

女の人には男の人が野次馬を押しのけて駆けつけた。男の人は伝助だつた。

「売られた喧嘩を買つて何が悪い…？！」

ミーシャは腕を組んで浮かない顔だ。

「…でもかけたんだろ？…呪術。」

伝助が頭を呆れ返つた顔をして言つた。

「…少しだけかけたような気がする。」

「少しだけつて…あんまり呪術を悪いこと使うなよ。後で罰が当たるぞ。」

伝助は左手で頭を抱えた。

「悪いことに使つた覚えはない…？」

ミーシャは、ライトに気付き、手招きした。ライトは小走りで駆け寄つた。

「旦那が覚めたんだね。あたしは、ミーシャ。うちの旦那があんたを教会に運んだんだよ。ああ、旦那ってのは…」

「俺のことだ。」

伝助はどうやらこのミーシャという女人の人と結婚しているらしい。

「そうだったんですね。ありがとうございました。あと、僕はライトって言います。」

ライトはペロリとお辞儀した。

「結構礼儀正しい子だね。ああ、あとペロ。あんたの剣折れてたから直しといたよ。にしても、細い剣だね。こんなだからすぐ曲がつちまうんだよ。まあミスリルで加工しといたから大丈夫だらうけど・・・それにあたしの呪も施してあるしね。」

ミーシャはライトに剣を手渡した。

「剣まで直して頂いて、本当にありがとうございます。」

ライトは早速腰に鞘ごと剣を提げた。

「もう一やあ、ライト、おまえセシティアに行くんだろう? 王を倒してください。」

「ええ、そのつもりですが・・・?」

「・・・なら、俺も連れてってくれ!!!」

「何言つてるの?! 赤ん坊だって生まれたばかりなのに・・・! あなたはうちの亭主なのよ・・・いなくなつたら・・・。」

伝助の言つたことにすぐさまミーシャは異議を唱えた。

「大丈夫、すぐ帰つてくるから。それまで、キリクのこと、頼んだぞ。」

伝助はミーシャを抱き寄せた。キリクとは、一人の子供らしい。

「・・・分かつた。行つといで、必ず帰つてくるよ!!」

。

ミーシャはそつとキスをした。

「・・・これも何かの呪か?」

伝助が頬を赤く染めて言つた。

「ああね・・・?」

ミーシャは伝助に背を向けた。ライトから見た横顔からは、微笑んでいるように見える。けど、涙が零れていた。

「さて、それじゃあ旅の用意をしなくちゃね! 食料も水も衣類も

いるね。そういえば、義手もいるかも・・・。

「義手はいらないって！！」

ミーシャと伝助はすぐに荷造りに入った。

「それじゃあ出発しましょうー！」

着替えてきたクレスが弓矢を掲げて叫んだ。

「本当にクレスも行くんだ・・・・。」

ライトが小声で言った。

「まあ、心配すんな。あれでも一級の弓術師だ・・・」

「きやつ！」

ズザ――――ツ

クレスが足を踏み出した途端、小石も何もないのにダイナミックにこけた。

「・・・・まあ、弓術以外のことは大目に見てやつてくれ！」

ははは・・・

ポンッポンッ

伝助が苦笑いして、ライトの肩を叩いた。

To be continued

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2945e/>

Wing 2

2010年10月10日15時30分発行